

博士論文 概要書

生活世界の位相に関する 考察

—現象学の視点から見た環境ボランティアと自然—

A Study on the Phase of “Life- World”

—Examining Environmental Volunteer and Nature from the Perspective of
Phenomenology—

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻 社会哲学研究

廣重 剛史

論文の目的

本論文は、エドムント・フッサールが提示した「生活世界 (Lebenswelt, life-world)」概念の位相を具体的に展開するための一つの試論として、環境ボランティアと自然の把握に関する問題を、現象学の観点から明らかにすることを目的としている。

論文の構成

以下に本論文の構成を述べる。

第一章 環境ボランティアの社会的布置

第一章では、主題となる日本の環境ボランティアの歴史的社会的な布置を、外観的に考察する。

まず、第一節では、環境ボランティアが解決に取り組んでいる、環境問題の現状を確認する。そして第二節では、環境ボランティアの形成を歴史的な文脈から確認する。その際、とくに第二節では、近代化以降の日本経済の動態との関係に焦点を当てている。なぜなら経済活動と環境問題は表裏一体の関係にあるといえ、前者に関する一定の認識なくしては後者の判断も定まり難いと考えからである。したがって二節では、「生活世界」の現代日本における位相の前提として、経済主義の様相についても必要な範囲で検討を加えている。

そして第三節では、二節において歴史的な文脈のなかで定位された環境ボランティアを、社会的役割の視点から考察している。その際、NPO やボランティアが担っている「共助」の役割を、「公助」を担う行政と、「自助」を担う市場との関係から考察している。そして同時に、このようなシステム的な補完関係とともに、NPO やボランティアには地域住民との人格的な交流も重要な課題であることも指摘している。

第一章では、以上のような歴史的社会的側面からの外観的考察により、現代日本が抱える環境問題とボランティアの課題を考察した。

第二章 生活世界の視座と地域環境の保全

次に第二章では、本論文の方法論的立場を明確化する。すなわちここでは、社会現象にアプローチする際の現象学、すなわち現象学的な社会哲学の視座の在り処を検討している。なお、ここで「社会哲学」とは、政治学、経済学、法学などが拠って立つところの基礎的領野を対象とする学問だと考え、その「基礎的領野」を現象学の観点から「生活世界」だと考えている。

そのために第一節では、「生活世界」概念の由来とフッサールによるその規定、およびその後の展開などを概観する。そして第二節では、「生活世界」概念を基礎にした上記の視座を明らかにするために、あらためてフッサールの超越論的現象学を再考する。そして、その検討を通じて、現象学的な社会哲学の視座が、生活世界を対象とした「外観的考察と内観的考察の往還」にあることを指摘している。

そして、第三節では、上記の方法の有意性を確認するための考察にあてている。その際、地域社会における生活環境問題の一つとして、開発による「アメニティ」の破壊を事例として取り上げる。そのなかで、住民やボランティアを主体とするその活動を、ただ外観的に考察するだけでは、当該活動の意味を十分に捉えることが出来ないという点が明らかにされる。そのため第三節の後半では、二節で指摘した現象学的な「内観的考察」への一つの通路として、和辻哲郎やオギュスタン・ベルクの「風土論」を取り上げている。そして、両者の主張を具体的に検討するなかで、住民やボランティアの活動を明らかにするために、内観的考察と外観的考察の双方が必要であることを確認している。

こうした第二章の考察全体により、従来の現象学では十分に展開されてこなかった「生活世界」の具体的な位相を明らかにすることへの道が示される。

第三章 東日本大震災と生活世界——「新しい防潮林づくり」を事例として

そして第三章では、前章までの考察を踏まえた事例研究をおこなっている。その際、本章では、東日本大震災後に被災地ではじめられた、地域住民とボランティアによる「新しい防潮林づくり」の活動を取り上げて考察する。

震災後、被災地では、津波で流出した防潮林を再生、あるいは新しく造成することに関する市民活動が活発化している。その活動には多様な団体が関与しており、防潮林づくりの方法も多岐にわたっている。そのなかで本論文では、とくに気仙沼市の震災復興計画に採用されており、筆者自身もその支援活動に携わっている、防災自然公園ベルト「海の照葉樹林プロジェクト」を中心に考察する。

その際、第一節では、市民主体で照葉樹を中心に植樹する防潮林づくりを「新しい防潮林づくり」と把握する。そしてまた、以下の考察で必要となるフッサールの現象学的視座について、あらためて「日常性」という観点から整理している。

そして第二節では、この「新しい防潮林づくり」を主導する、被災地全体で進行している「いのちを守る森の防潮堤」の活動と、上記の気仙沼の「海の照葉樹林」の活動、および、これらと関係するボランティアの在り方について具体的に検討し、その特徴を明らかにする。

今回被災地ではじまっている「新しい防潮林づくり」は、第二章でも明らかにされたように、これを内観的にも考察する必要がある。たとえば今回の津波で生じた二千数百万トンの瓦礫は、関係主体によって「危険物」や「資材」など、多様な「意味」で把握されている。

しかし、被災者にとってそれは、家族や愛する人たちとの「生活そのもの」だと、現象学の意味構成の観点からは考えられる。また、震災後に気仙沼前浜の住民たちは、子供のころから慣れ親しんできたツバキを復興のひとつの象徴として把握している。このことに見られるように、内観的に見られた自然は、外観的な「客観的自然」とは異なって、いわば「物語としての自然」であることが明らかにされる。

また、第三節では、さらにその活動の「意味」を判明するため、その活動を推進するにあたって障害となっている、「コンクリートの巨大防潮堤建設」の問題と、「クロマツ中心の防潮林づくり」について検討を加えている。

そして、これらの事例と比較検討することを通じて、この「新しい防潮林づくり」の背後にある意味が、「近代的な人と自然との関わり方のゆらぎ」であることを明らかにしている。それは具体的に言えば、自然災害への危機管理を「人間による自然の支配」という近代的な世界観のもとで考えるか、あるいは人間理性の有限性が自覚された、「自然への順応」という世界観のもとで考えるかという、世界観のあいだでの「ゆらぎ」だといえる。本章はこのことを具体的事例において確認している。

第四章 環境ボランティアと世界観の再考

そして第四章では、前章の事例研究を通じて明らかになった論点を、あらためて現象学的な観点から基礎づける。そのため四章では、従来の「人と自然との関わり方」を規定していたものとして「近代的な世界観」について再考する。そして本章では、その世界観の代表的な特徴である、「人間中心主義」と「経済主義」をとくに取り上げて考察している。

前者の「人間中心主義」に関しては、第一節で環境倫理学の主張を参考にしながら、その問題点を明らかにしている。ただしここでは、人間中心主義を批判的に把握することと同時に、環境倫理学そのものの「自然」の把握に対する問題点も、現象学の観点から明らかにする。

すなわち、環境倫理学の代表的な主張の多くが依拠している「自然」は、生態学的知見に基づいた「関係的な自然」である。その点でこの自然は、従来の機械論的な自然観とは異なるが、その自然は「客観的自然」として捉えられている。その意味で、この「関係的自然」は、これを外観的にのみ捉えれば、近代的な世界観とその前提を共有していると考えられる。

また第二節では、経済主義的な思想の根本にあると考えられる、近代的な「未来志向」について、時間論の観点から検討している。その際、シュッツの「生き生きした現在の共有」という概念に着目し、ここから「人と人の共生」の意味について、現象学的な観点からの検討を加えている。

そして第三節では、そうした近代的な世界観を相対化する視座を、フッサールの後期思想のなかから再構成することで、「人と自然との共生」の哲学的な根拠について考察している。あらためて述べれば、近代的な世界観のもとでの自然は、主観と切り離して認識しようとされ

る「客観的自然」だと考えられている。そこでは、自然が認識主観とは無関係に「実体」として存在し、人間は理性を用いて、その構造や論理を解明しようと考えられている。

しかし、「客観的自然」や「関係的自然」は、「物語としての自然」と同様に、意識との関係から見れば、いずれも「意味的对象」すなわち「意味としての自然」だと現象学の立場からはいえる。これに対して、晩年のフッサールにおいて垣間見られた「根源的自然」は、「対象化」それ自体を促していると考えられる自然である。そして、この「根源的自然」とは「流れとしての生」、すなわち「自然全体の持続的な生命の流れ」だとも言い換えられる。そしてこの「流れ」そのものが、「自然と人間とのつながり（共生）」を生じさせる、超越論的な次元での根拠であることが、フッサールの思想から導出される。

そして最後に、結語において以上の考察から明らかとなった「自然」の把握を整理して提示する。そして、これまでの流れを振り返り、「生活世界」の射程が、日常生活から「生」それ自体の根本的な再考までを含むことを指摘する。そして、あらためて現代日本が直面している生活世界の「危機」が、各人の生きる意味の根拠の喪失であることを指摘し、これを実践の基礎学として提示し、論文を終える。

注釈)

- 2 ページ以降は No. 1 を複写してご利用ください。
- 副題は使用される場合のみ記載してください。
- 本文が英文による場合、和文・英文の表記位置を入れ替えてください。